

問一

本来の演劇は、観客が囲い込まれた舞台を静かに眺めるものではなく、劇場全体において、主体である観客が問い演者が応じるという動的な営為であるということ。

（解答欄 3 行）

問二

観客の反応とは無関係に固定された物語を展開する映画には、時機を逃さぬ拍手を観客に促し以後の物語を進行させるといふ演劇のダイナミズムは生じてこないから。

（解答欄 3 行）

問三

近代劇の観客は、日常を模倣するだけの舞台を見させられる受動的な存在に甘んじるよりも、舞台を作り出す側にまわりこんで、わずかに主体性を補おうとするから。

（解答欄 3 行）

問四

芸術から自己の独自性を探りだし獲得しようと競い合う経験が積み重なって成立した、近代的な観念の所産。

（解答欄 2 行）

問五

自由な精神の運動によって生み出される本来の芸術は、制作者と享受者の応答によって成立する主体的な営みであるが、芸術が日常の模倣と化した近代では、制作者も享受者も他と精神的に呼応することを拒絶し、自我を補強する材だけを芸術に求めようとしているということ。

（解答欄 5 行）

問一

突然に閃くのではなく、自己の心身が徐々に変容する過程において、それまでの数学的な様相が根本的に変化した結果、わかったという心の状態が自ずと生じるということ。

（解答欄 3 行）

問二

自然法則に複雑に決定されている現象は、人間がその全体像を計算することは至難だが、自然はそうした計算とは無関係に、その現象の総体を現に導出し続けているから。

（解答欄 3 行）

問三

数学的思考は、記号的な計算だけに還元されるものではなく、環境と豊かに交錯する人間の身体に自ずから宿る、非記号的で瞬間的な思考過程に依拠しているということ。

（解答欄 3 行）

問四

自他や時空の区別を超越した意識が、身体的な思考過程を通じて、眼前のありのままの生きた自然を、自らの生そのものと瞬時に重ね合わせて把握することによって。

（解答欄 3 行）

問五

数学研究が、記号的計算に尽きるものではなく、環境と交感しあう人間の身体に宿る非記号的で瞬間的な思考過程に大きく依拠しているなら、それは研究主体の自己のありようそのものと密接に関わってくるということ。

（解答欄 4 行）

問一

(1)

雪景色に水鳥の声の響く朝の情趣につけても風流を解する友が来てくれたらいいなあと、人恋しく思ったその時、

(解答欄 2 行)

(3)

今回、高齢のため酒肴の準備ができない私だが、皆さんをもてなす気持ちだけは、酒肴の準備に奔走する時の気持ちに劣るだろうか、いや、劣りはしないのだよ。皆さん。

(解答欄 3 行)

問二

雪の朝に兼好が知人に事務的な手紙を送ったところ、雪に言及のない無風流を咎められたというが、今届いた手紙が雪景色を愛でているかと思機を逃さず問うてきたからには、雪に言及した返信をしないと無風流を恨まれるだろうから、雪見に誘おうと思っただけという意味。

(解答欄 5 行)

問三

客に漢詩を所望されたものの、作者は年老いてしまい、風流なものにふれても詩想も湧かず、詩作からも離れて久しいので、うまく作れないだろうが、今日の雪の中の来訪が嬉しいから、拙いながら作ってみようという意味。

(解答欄 4 行)

問四

作者は老いぼれていて、故事に名高い戴安道に比べると恥ずかしいほど劣るが、ただし、雪の中を訪ねて来てくれた作者の客は皆、故事の王子猷と同様に風流だという意味。

(解答欄 3 行)